

万次郎人生の概観⑨「黒船の再来」

(1)万次郎がペリーとの交渉の場に立つことはなかった！

ペリーが江戸を後にして以降、幕府は日本の交渉の実務を伊豆韮山代官江川太郎左衛門に当たさせた。江川は交渉の通辞を万次郎に当たらせるつもりであった。

しかし、江川の上司である筆頭老中阿部伊賀守や御三家徳川斉昭らは、万次郎が通辞として交渉に当たることに反対であった。二人とも万次郎が祖国日本を裏切り米国が有利になるような通訳を行うことはないとは考えていた。しかし、万次郎は米国に命を救われ、学問や生活等数々の恩義を受けており、米国の要求に押し切られ、日本側が不利となる通訳を行う可能性もある。いろいろなことを鑑みたとき、万次郎を日米交渉の場に立たせることは控えた方が良くというのが二人の意見であった。

結果的に万次郎どころか、その上司である江川太郎左衛門でさえ、日米交渉の場に立つことはなかった。何の手違いがあったかは不明であるが、江川が交渉の地「横浜」に到着すると、既に交渉は終了しており、江川は憤慨して江戸に戻ったと伝えられる。まったくお粗末な話である。それだけ幕府の威信は傾き、地に落ちていたということだろう。

(2)日米和親条約の締結

嘉永七年(1854)1月16日、ペリーは浦賀に7隻の軍艦からなる艦隊で再来した。その後、合流した2隻を加え、軍艦は全9隻となった。幕府はその軍備に圧倒された。2月10日、条約締結のための交渉が神奈川(横浜)で行われた。

3月3日、ついに「日米和親条約」が締結された。200年余りにわたった日本の鎖国に終止符が打たれた。ここでその内容を簡単に紹介する。

【日米和親条約の概要】

- ①日本側全権・林大学頭と米国側全権・ペリーとの間で調印された条約。
- ②全12条からなり、(1)日米の親睦、(2)下田・箱館(函館)の開港(米国船籍が入港することが可)、(3)食料・石炭・薪水等の補給、(4)遭難船・乗組員の救助、(5)領事の駐日、(6)米国に最恵国待遇を与える。

最恵国待遇とは？＝他国と日本が米国よりも良い条件で条約を締結したとしても、米国にも同様にその条件が適用されるということ。

(3)万次郎の江戸での生活 結婚と妻「鉄」の死

万次郎は、嘉永七年(1854)2月12日、本所亀沢町に剣道場を営む団野源之進と次女・鉄と結婚した。上司・江川太郎左衛門の仲立ちである。

二人は、新婚生活を江川家邸内の長屋で営んだ。結婚後は、勘定奉行川路左衛門尉(聖謨)



の依頼で箱館奉行手付となって北海道の箱館(函館)に捕鯨指導に行ったり、軍艦教授所の教授になったり、『ボーディッチの航海書』の翻訳や『日米対話捷徑』を作成したり、何かと忙しく家を空けることが多かった。これを鉄が支えた。鉄は明るく闊達な女性であったと伝えられる。父親不在の中を明るく元気いっばいに子育てをしている鉄の姿が想像できる。

一家は、安政四年(1857)春、上司・江川家の転居に従い深川から芝新銀座へ転居した。

その年、7月7日に長男東一郎が誕生。しかし、その5年後の文久二年(1862)、関東地方で麻疹(はしか)が大流行した。現在、麻疹は死に至る感染症ではないが、当時は特効薬もなく、死亡する人が多かった。鉄は一男二女(寿々・東一郎・鏡)を遺し、7月21日25歳の生涯を閉じた。

(4) 精魂を傾けた『ボーディッチの航海書』の翻訳

とベストセラーになった『英米対話捷徑』

『ボーディッチの航海書』は、米国の航海書の原典ともいわれ、航海者の必読書と当時いわれていた。幕末、海外との往来は船便が中心であり、島国日本にとって航海は必要不可欠の重要事項であった。故に、幕府は米国でこれを直接学んできた万次郎にその翻訳を命じた。当時の日本では航海用語がまだ無かったから万次郎は随分と苦労した。この本は、本文と数立標の二巻から構成されている。筆写した物を20部作成し、その一部を幕府に提出している。

『日米対話捷徑』は、木版刷りのポケット版の英会話本である。内容は英会話文に万次郎がふったカタカナの発音と平仮名の訳文を付けたものである。

江川太郎左衛門の部下となり、結婚して家庭を持ち、幕末の日本で一つ一つ大切な職務を全力でこなしていった万次郎。安政二年(1855)1月16日の江川太郎左衛門の死、文久二年(1862)7月21日の妻・鉄の死、これらの大切な人々の死を乗り越えて、激動の時代を万次郎は精一杯生きていた。

…続く

【編集後記】

昨日8月30日、当室吉本工心職員と高知県立埋蔵文化財センターを訪ねた。資料編第3章市域中世山城上空写真の山城上空写真の加工に関して、加工をフォトショップで行っていただいている同センター吉成調査課長を中心に打ち合わせを行うためである。

委託業者「㈱ぎょうせい四国支社」藤山昌士出版営業課長代理、高知県立歴史民俗資料館松田直則副館長(市史編集委員)ら5人がこのことについて協議した。

あと「第2節中世～近世石造物」「第3章市域中世山城上空写真」「第4章学校資料から見る地域の教育・社会・文化」の3章分。何とか9月中にゲラ前原稿を仕上げたいと思います。あと一息です。最後の最後までよろしくお願いします。(田村)